書評

『フィールドワーク探求術
——気づきのプロセス，伝える力』
●西川麦子 著
（ミネルヴァ書房，2010年，A5判，180頁，2,310円）

『質的調査の方法——都市・文化・メディアの感じ方』
●工藤保則・寺岡伸悟・宮垣元 編
（法律文化社，2010年，A5判，165頁，2,520円）

●北　澤　　毅
（立教大学文学部教授）

質的調査法への関心がますます高まるなか，西川麦子著『フィールドワーク探求術』と工藤保則ほか編『質的調査の方法』は，質的調査に足を踏み入れようとする者にとって格好の入門書になると思われる。どちらも平易な語り口でさまざまなフィールドへと読者を誘いながら，読者に身近な世界を探求することの困難と面白さとその世界を探求するための具体的な実践方法を教えてくれる。

西川麦子著『フィールドワーク探求術』では，卒業論文作成時から現在の研究まで，著者自身の調査経験を振り返りながら，フィールドワークを行うにいたった経緯，問題関心の設定，調査方法の選定などが詳しく説明されている。著者のフィールドワークは日本国内での産婆への聞き取りに始まり，バングラデッシュ，インド，イギリスと展開していくのだが，こうしたフィールドや調査目的の変化は，著者をとりまく研究環境やライフスタイルと折り合いをつけていくなかで見いだされていく。なかでも前半の「事例編」が面白かった。フィールドワーカーになるプロセス，調査する喜びと困難がよく伝わってくるし，なかでも「『何でもみてやろう』の落とし穴」で紹介されている「生業としての物乞い」の話は興味深い。しかし，物乞いが社会のなかでどのような意味をもち機能を果たしているかの分析は紹介されていない。読者は宙づりにされ，西川氏の本を読みたいという気持ちにさせられる。こうした仕掛けは本書のなかに散見されるが，著者がどこまで戦略的に振る舞っているかはわからないがお洒落な演出だと思った。新しいフィールドに入った当初は，調査者はほとんど迷い人のようなものだが，あれこれ手探りでぶつかっていくなかで，当然，異文化への抵抗感も味わい苦しむが，同時に，調査対象社会の広がりや深さを実感できるようになり新鮮な驚きや高揚感を覚えることになる。そうした調査者としての経験が十分に伝わってくる内容になっており，本書に導かれてフィールドワークの世界に挑戦したいと思う読者が１人でも多く出現することを願いたい。

一方，工藤保則ほか編『質的調査の方法』では，調査方法ごとに章編成がなされているため，読者の関心にあわせて調査方法を知ることができる。たとえば，調査者自身が「バイク便ライダー」の参与者となり，仕事の経験や同僚との交流から得た知識をもとに新たな知見の構成を試みる参与観察法（第５章），「援助交際」を行う女性たちへのインタビューからその世界を描きだそうとするインタビュー法（第６章），「具体的な人間」の生に肉薄するためのライフストーリー法（第７章）などが紹介されている。いずれもフィールド調査のなかで採用される方法であるが，質的調査においてはテクストもまた重要な素材となるのであり，日常生活のなかでごく普通に触れている歌詞やアニメを「聴く」「見る」から「読む」対象として接近する方法を提示している（第８章，第９章）。さらに，暮らしのなかのモノと人との関係をフィールドワークから問う方法など（第10章），手を伸ばせばすぐそこにあるモノから社会を読み解く面白さを読者に教えてくれている。しかし，身近な世界だからわかりやすいということにはならない。本書で一番印象に残った言葉は「違和感」（49頁ほか）であるが，日常風景の一部として何気なく見ているバイク便ライダーの世界も，自分の身を投じることではじめて「違和感」とともにわかることがあるという指摘は示唆に富む。

異文化世界で覚える「抵抗感」，日常世界のなかで覚える「違和感」。調査者が接近しようとする世界に何らかの「ざらつき感」「異質感」を覚えるからこそ探求心が刺激されるということでは両書は共通しているように思った。

書 評

『国際比較にみる世界の家族と子育て』

●牧野カツコ・渡辺秀樹・船橋恵子・中野洋恵 編

（ミネルヴァ書房，2010年，A5判，221頁，2,625円）

●田渕 六郎
（上智大学総合人間科学部准教授）

本書は，文部科学省が2005年に実施した「家庭教育についての国際比較調査」に依拠した，第一線の家族社会学者らによる一書である。同調査は，日本，韓国，タイ，アメリカ，フランス，スウェーデンの6ヵ国について，0〜12歳の子どもをもつ1,000名（父親・母親各500人）を対象に実施された，家族や家庭教育に関する調査である。

本書は全6章で構成され，1994年に行われた前回調査との比較も交えながら，現代の家族と子育ての現状とその変容を浮き彫りにしている。各国の子育て関連事情について多くのコラムも添えられており，読者の理解を助けている。

1章では，家族構成，保育環境，家族観などが国によって大きく異なるという概況が示される。2・3章は，夫婦間での子育ての分担，父親の子育てと家族への関わりを扱い，日本の父親の子育て分担は対象国の中で最低水準であり，ほとんど変化していないことなどが明らかにされる。こうした知見をもとに，日本におけるワーク・ライフ・バランスの推進などが提言されている。

4章は子どもへの期待と子育ての悩みを論じ，日本では子どもに学校でよい成績をとることを期待する割合がもっとも低いなどの知見を示している。5章では，親になるための学習において，日本では育児書への依存が高いことなどを明らかにしつつ，親になるための家庭教育支援の必要性を主張している。6章は，子育てをめぐるネットワークと子育て環境を扱い，各国の子育て支援制度の概観に基づいて，日本の子育て支援の政策課題を論じている。

データに関して気になる点としては，すべての国で調査は面接法によって行われているが，日本以外では標本抽出に割当法を用いていることがある（したがって，日本以外については回収率も計算できない）。これが結果にどのような影響を与えるかは自明ではないが，他のデータセットとの比較がなされることは意味があるだろう。

とはいえ，本書が依拠する国際比較調査は，同一の調査票を用いた，国際比較研究を行ううえでは貴重なデータである。大規模な調査であっても，年少の子どもをもつなどの特定条件を満たすケースは少ないことが多い。この調査のように1,000名という標本規模であれば，さまざまな詳細な分析が可能なはずである。省庁が主体となって行われた類似の国際比較調査としては，内閣府の「世界青年意識調査」などがある。こうした貴重なデータセットが，公開利用に供されることで，社会調査環境が向上していくことを期待したい。

本書より先に公刊された報告書は，主要部分がすでに国立女性教育会館のホームページで公開され，研究者らに利用されてきている。本書は，単純集計レベルでの比較を中心にしているなど，一般書としての性格が濃いが，報告書とは異なる知見や主張を多く含んでおり，社会学ほかの分野の研究者にとっても有意義な書物となるだろう。個人的には，学部生向けの副読本として用いられることで，国際比較研究への関心を深めるのに最適な教材であると感じた。多くの人が手に取られることを期待したい。